
天架ける橋

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天架ける橋

【Nコード】

N6679B

【作者名】

詩音

【あらすじ】

高校一年生だった俺は保健室で会った女の先輩と偶然知り合った。その先輩はいつも空の写真を撮っている。天国を見るために……

はじまり。(前書き)

恋愛は似たような話になりやすいかもしれませんが、頑張っ
て書こうと思います。どうかお付き合いください。

はじまり。

三月九日――

俺はこの日、高校を卒業した。

高校生活ずっと過ごした教室。仲間とともに汗を流した体育館。
授業のサボりに使った屋上――

友人達と後で落ち合う約束を交して俺は学校中を歩き回った。

「一通り見たか……」

呟いた言葉は夕闇に溶けて消えた。帰ろうと足を下駄箱の方に向けるが、思い止まった。

まだ行っていない場所がある、心の中にいる俺はそう言っていた。

あれから行くのが怖くて行っていない保健室。俺は静かにドアを叩いた。

コンコン。

「どうぞ。」

懐かしい少し低めの声。俺は深く息を吸ってドアを開けた。

「失礼します。」

俺の登場は保健室の主を驚かせるものだったようだ。

「……。」

「ども。」

予想通りの表情に笑みを浮かべながら俺は頭を下げた。

「……おう。」

「何か言ってくださいよ。結構めでたい日なんですから。」

「あー…卒業オメデトウ。」

「ありがとうございます。」

今日が卒業式だというのにも関わらず、いつも通り白衣姿の先生には妙な安心感を覚えた。

たぶん卒業式には参加しなかったんだろ？な…頭の片隅で思う。

「つつかお前、俺に敬語使えるようになったんだ？」

「そりゃあ、あれから一年以上経ちましたから。」

「…もうそんなに経ったんだな。」

吸って良い？と煙草を見せて先生は聞く。

「他の先生に怒られますよ？」

「滅多に来ねえよ、先生も生徒も。」

結局俺の承諾を聞かずに先生は煙草に火をつけた。

「保健室の常連はもういないしな。」

煙を吐き出し、ぽつりと呟く。それは何処か寂しそうに見えた。

「先生。」

「あ？」

「今日天気良いですね。」

俺は窓から空を見た。

雲一つない青空。まるであの人みたいだ、なんて思った。

「これ。」

無表情の先生から渡されたのは花束だった。

「……まさか俺に？」

そんな趣味は無いんだけど……。

「馬鹿か、中野にだよ。今日行くんだろ？」

「……ありがとうございます。」

直角に一礼して俺は三年間過ごした学校に別れを告げた。

俺は花束を持って目的地へのバスに乗る。

バスの中は閑散としていて乗客は少なかった。

「……。」

花束を見つめ、窓の外を見る。

初めてあの人に会ったときも、こんな綺麗な空だった――

俺は揺れるバスの中で高校一年生の頃を思い出していた。

出会い。

仄かに香る消毒液独特の匂い。学校にそんな場所があるのはただ一つ。

俺、ヤマザキユウト山崎優斗はその保健室の前にいた。

「先生ー。」

「…またかよ。お前ここんとこほぼ毎日来てるじゃねえか。」

「ほぼじゃないよ、毎日来てる。」

「馬鹿、同じだろうか。」

キツく睨まれながらも、俺が追い出されることはない。

俺と話している彼は阿澄博人。アズミヒロト日本中探してもそうそう見付からない、男の保健室の先生である。

堅物っぽい顔立ちだが、校内の女子に結構人気がある。ダークグレーのスーツと白衣が有り得ないくらい似合っているのも理由に入るだろう。

「…今日は何だよ。」

そう、こんな風に文句を言いつつも心配してるところも生徒から好かれる理由だ。

「腹痛…ってことにしといて。」

「…またサボりか。」

「……。」

俺は答えずにベッドに潜り込んだ。

いじめられるわけじゃない。友達もそれなりにいるんだ。なんとなく…ただなんとなく何に対してもやる気が起きない。生きる気力がなくなっただなんて…どれだけ俺は疲れてるんだろう。

「一時間だけだからな。終わったら教室戻れよ？」

サラサラと紙の上でペンを動かす。

「了解……。」

そう答えた後、俺は意識を失った。

ガラッ……

「……？」

保健室への来訪者に目が覚めた。

俺のベッドの周りはいつの間にかカーテンで仕切られていて、来訪者の顔が見えなかった。

「お前もまた来たの？」

「お前もって……何、あたし以外に常連がいるの？」

女だ。高く澄んだ綺麗な声。眠気の消え失せた俺はしばらく二人の会話に耳を傾けることにした。

「お前の二個下だな。」

「へえー。高一で保健室の良さがわかるなんて凄いね。友達になれそう。」

「なるな。保健室は出会いを求める場じゃねえんだよ。」

「あたし恋愛は興味ないもん。同じ保健室愛好者がいるなら知り合っておきたいし。」

「あつそ。」

話は中断した。授業の終わりを告げるチャイムが鳴ったからだ。

「山崎ー、授業終わったから教室戻れ。」

「……はい。」

ベッドから離れてカーテンの外に出る。

「貴方が保健室愛好者？」

「……。」

俺と同じように制服に身を包んだ女子がこちらに寄ってきた。

丸い瞳に二重まぶた、肌も白くて外国の人形のようなだった。でも腰まである真っ直ぐな黒髪が日本らしさをかもしだしている。

「もしもーし？」

「あ……そうです。」

目の前で掌をかざされてボーツとしていた自分に気付く。

「そっか、よろしくね。あたし中野歌穂^{ナカノカホ}。高校三年です。」

「高一の山崎優斗です……。」

自己紹介をされて俺はまごつき、しょうもない自己紹介で返した。

「ほら、これから仕事すんだから帰れ。」

「先生の仕事は体調不良の生徒を見ることでしょ？」

「お前らの何処が体調不良だ。」

一喝されて俺と中野先輩は追い出された。

「あーあ、追い出されちゃった。」

軽く背伸びをして中野先輩は下駄箱の方に足を進めた。

「中野先輩？何処行くんですか？」

「帰る。」

「……は？」

「今日は帰るの。」

ポカンとする俺に中野先輩は言葉を繰り返した。

「じゃあね、山崎君。」

軽い足取りでその場を去っていった。

「……………」

今は三時限目が終わったところ。まだ授業は残っているのに……

「アイツ帰ったの？」

「阿澄先生。」

保健室のドアから顔を覗かせて先生は言った。

「いつもあなんですか？」

「そ。授業にはまともに出てない。」

「だって出席日数とかは……」

「うちの学校は赤点とらなきゃ関係ねえ。お前だってわかってんだろ？」

確かにそれは知ってる。だから俺もこうやってサボっているのだ。うちの学校はそれなりに有名な進学校だから、学校には勉強だけのために来てるような奴らばかり。そんな中で、俺や中野先輩みたいな人は珍しい人種だろう。

「……まだ溺れてんだな。たぶん。」

「……………え？」

「何でもねえよ……っていうかお前授業行け……………」

その瞬間、チャイムが学校中に鳴り響いた。

「……………」

「……………」

俺はもう一時間だけ、保健室で眠ることを許された。

写真とネックレス。

「先生、今日は頭痛…」

いつものように保健室のドアを開ける。

「あ、おはよう。」

そこにはテーブルをはさんで向き合っている阿澄先生と中野先輩がいた。

「常連その二が来たな。」

「その二って…」

微妙な言い回しに俺は脱力感を覚えた。

「じゃああたしがその一かあ。」

何故か中野先輩はその微妙な言い回しを受け入れたようだ。

「それにしても、入学して三ヶ月で保健室に入り浸るって大丈夫なのか？」

コーヒーを片手に先生は俺に聞いた。

「その分家で勉強してるから。」

「偉いんだね、山崎君。」

「…中野先輩はどうなんですか？勉強…っていうか受験は。」

褒められることはあまりなかったから、俺は少し照れ臭くなって話を中野先輩に変えた。

「あたし？受験っていつでも大学行くつもりないからな…」

「……大学、行かないんですか？」

これには驚いた。前にも言ったが、うちの学校は進学校で国立大

学に進学する人間も珍しくないからだ。

「うん。前は行く予定だったんだけどね。専門学校に行こうかな、
つて。」

「専門って何の？」

「写真！。あたしの見る？」

学生力バンから取り出したのは透明のカバーのアルバム。

中には青空や雲の写真が何十枚も並んでいた。

「……。」

綺麗だと俺は思った。それだけじゃない、中野先輩の目線で見る
世界が何処か輝いてみえたのだ。

「山崎君？」

「…えっ、あ…何ですか？」

「何って…どう？」

不安そうな先輩。

そつえば何后感想を言ってなかった。

「綺麗、です。」

「ホント？良かったあ。」

俺の言葉に表情が笑顔に変わる。

「へえー、結構やるじゃん。」

阿澄先生が俺の持っているアルバムを覗く。

「先生も良いと思う？」

「ああ。」

フツと笑みを見せてアルバムを中野先輩の頭に乗せた。

俺から見れば恋人同士のように見える。

「それより山崎。何でお前俺には敬語使わねえの？中野には敬語で
話してんのに。」

「えーっと…なんとなく？」

「先生って兄貴っぽいよねー。だからじゃない？」

「俺は一人っ子だ。」

阿澄先生はたまに、ほんの少しだけ天然ボケだと思う。

「あー…何か今日は良い写真撮れそう。」

ぼんやりとしながら中野先輩は呟く。そのとき、先輩の首元のチエーンが俺の目に入った。

「先輩ネツクレスやってるんですね。」

「…あー、これ？さりげないオシャレよ。」

「…そうですか。」

間があつたのは気になったが俺には聞ける勇気がなかった。先輩だけでなく、先生の表情も固まったからだ。

「さて、帰ろうかな。」

椅子から立ち上がって先輩は言った。

「弁当無いんですか？」

もうすぐ昼休みなのだ。

「うん、家に帰って食べるから。じゃあね、また明日。」

ひらひらと俺と先生に手を振って先輩は保健室から出ていった。

「……先生。」

「あ？」

阿澄先生はコンビニ弁当のフタを開いたところだった。

「中野先輩っていつから此処に来てんの？」

俺もカバンから弁当を取り出す。弁当と言ってもコンビニで買ったパンだ。

「高二の二学期。」

「結構前からなんだ…」

「気になんのか？」

「べ、別に…」

俺は慌ててパンを口に突っ込む。

図星だった。確かに気になるが、恋愛としてではなく好奇心のよ

うなものだ。

「アイツはお前じゃ手におえないよ。」

「……何それ。」

何でもわかっていのような台詞だ。

「中野歌穂っていう女はお前の何倍も大人だつてこと。」

謎めいた言葉に俺の頭は絡まるばかりだった。

写真とネックレス。(後書き)

読んでくださりありがとうございます。

さて、このお話ですがなかなか暗い話になってます。最後はハッピーエンドにしようと思いますので読んでみてください♪

ちなみに、更新はだいぶ不定期になります。最低でも週一を心がけますのでよろしく願います。

告白。

高校一年になって初めての中間テストが終わり、しばらくは脳味噌を解放さたかった俺だが……

「中野さんのことが好きなんだ。」

「え……。」

とんでもない場面に遭遇してしまった。

真剣な顔の男と保健室愛好者仲間の中野先輩の告白現場だ。

上の言葉でわかると思うが告白されたのは中野先輩。軽く頬を染めた男は俺から見てもなかなか整った顔立ちをしている。

「あの……。」

「あ、返事はいつでも良いから……!!」

話を聞かない相手の男。中野先輩が困っているのがわからないのだろうか。

「違うの。」

中野先輩ははっきり言った。

「え……。」

「あたし、彼氏いるから。」

「あ、そうなんだ……そっかそっか。」

はは……と乾いた笑みを浮かべる男。予定外だったようで、頭を掻く。

「ごめんね。」

「いや、俺の方こそ……。じゃ、じゃあまた……」

気まづくなっただろう。男は走り去っていった。

「……。」

彼氏いるから――

その言葉は俺にも衝撃だった。そんな話をしたことも、されたこともなかったから仕方ない話なのだが。

「山崎君ー、出て来たら？」

「……。」

バレてたらしい。俺は木陰から顔を出す。

「覗きなんて悪趣味ー。」

「や、好きで覗いてたわけじゃ……。」

掃除当番でゴミ捨てを押し付けられただけだ。

「まあいいや。あたし帰るね。」

くるつと俺に背を向けた先輩の制服のスカートがひらり、と揺れた。

「…先輩ー!!」

気付いたら俺の口は勝手に先輩を呼び止めていた。

「何ー？」

「…あ、あの、彼氏いるんですか？」

「……。」

聞いてしまった。自分の頬が急激に熱くなるのがわかる。

正直自分でも何を言ってるかわからなくなる。

「気になる？」

「……。」

「ごめんね、今は秘密なの。」

口許に人差し指を添えて先輩は柔らかに笑う。

その姿に俺の心臓が騒がしくなった。この感情を、俺は知ってい

る気がした。

「それに覗き魔君には言えないよ。」

「だから俺は……」

「わかってるよ、掃除中なのにサボってて良いの？」

先輩が俺の横にあるゴミ箱を指差して言う。

「……あ。」

携帯電話を見れば五分以上経っている。確実にクラスメイトにどやされるだろう。

それを想像してうなだれる俺を見て、先輩は声に出して笑った。

「じゃ、ばいばい。」

軽やかな足取りで進む先輩の後ろ姿をじっと見つめていた。

それから数日経った日曜日――

「暇だー。」

俺は勉強の予習も一通り終わり、空いた時間を持て余していた。

本屋にでも行こう。そう考えたのが変化の始まりだったのかもしれない。

天国の存在。

緑が青々として、日差しが強まってきた。それは夏が近づくことを意味している。

一通り用も済んでしまい、今は適当に散歩をしているところだ。

「あれ……？」

人混みに紛れて見知った人物を見つけた。

「中野先輩……」

紺色のワンピースに白いカーディガンを着た先輩は黙々と歩いていた。

近くに同世代がいないのを見ると、一人だということがわかる。声をかけようか、なんて思った瞬間――

「あ。」

先輩がこっちを向いた。俺を見つけて、嬉しそうに寄ってくる。それだけでも俺は自分が少し特別な気がして顔がほころんだ。

「偶然だねー、さすが保健室同好会仲間……」

さっきの無表情が此処まで笑顔になると驚いてしまう。しかも愛好者から同好会に発展したらしい。

「買い物？」

「ちよつと本屋に……先輩は？」

「あたし？うーん……一緒に来る？」

俺は先輩がずっと持っていた物に気付いていなかった。

「此処ー。」

先輩に連れられてきた場所は町外れの公園跡地。草は伸び放題で遊具は錆び付いている。

「こんなところに何があるんですか？」

「空。」

スツと人指し指で上を指差す先輩。

「…空？」

「うん。あたしが撮ってる気に入った写真は大体此処で撮れるんだ。」

先輩に倣って空を見上げた。青々とした空は何もかも吸い込んでしまいそうに見えた。

正直俺には空なんて何処で撮っても同じ気がしたが、この隣にいる写真家には違うらしい。

「あたしね、天国が見たいの。」

ベンチに座り、先輩は呟く。

「……え？」

先輩が自殺を考えてると思い、顔がサツと青ざめるのを感じた。

「あ、違う違う。生きたままってこと。」

俺の考えがわかった…通じたのか、きちんと否定してくれた。

「生きたまま天国が見たい？」

でも俺にはよくわからない。

「地に足をつけたまま、天国が見たい。」

「……はあ。」

曖昧な返事をする。

「あはは、わかんないよね。あたしも自分が何言ってるのかわかんないもん。」

「……。」

「ねえ、山崎君。天国の存在を信じる？」

「別に……。」

そんな風にしか、言えなかった。阿澄先生みたいに大人ならもつと良い言葉が言えただろうな、なんて頭の片隅で考える。

「あたしは信じてる。……じゃなきゃ、死んだ後幸せになれないもん。」

先輩はカメラを空に向けて構えた。

「一瞬だけ、それだけでも良いから……天国を見たい。」

カメラで顔が隠れてたから先輩の表情は俺には読み取れなかった。

このときの俺はまだまだ子供で、先輩の気持ちをまったく理解出来ていなかった。

今日は何の日？

「最近保健室行くの多くねえ？」

数少ない友人で坊主頭のサイマヒサシ斎間久志に言われた一言。

「そう？」

「だって前は三日に一回くらいだったじゃん。今は毎日。」

そう言われるとそうかもしれない。

「保健室のセンセに恋でもしたのか？」

「馬鹿、うちのは男だ。」

「……あ。」

こいつは自他ともに認める健康体だ。……ついでに言つとアホ。

何でこの学校に入れたのか。

俺は軽く笑って教室をあとにした。

「こんにちは。」

「またお前かよ……。」

「山崎君昨日ぶり！」

呆れる阿澄先生と相変わらず笑顔の中野先輩。

最近じゃそんな様子も慣れたものだ。

「昨日って日曜だろ？何で会ったよ。」

「被写体探してたら会ったの！！奇遇だよね！」

「へえ……」

ニヤニヤして先生が俺の方を見た。

「……何。」

「別に？」

先生は俺のことをからかってるようだ。俺は黙ってその笑顔が消えるのを待った。

「あ、ヤバイ。そろそろ行かなきゃ。」

先輩は慌ただしく帰り支度を始めた。

「用事あるんですか？」

「うん、ちよつとね。」

「中野。」

先生が先輩を呼び止める。

「んー？」

「今日なのか？」

「……うん。」

何の話だろう。俺にはまったくわからず、疎外感だけが出てくる。行ってきます。」

先輩は保健室から去った。残されたのはいつものように俺と阿澄先生だ。

「今日何の日なの？」

「さあな。」

「……知ってんのに言わないわけ？」

自分が知らないことを目の前の男が知ってるのは複雑な気分だ。今思えば妬いていたと思う。

「デートどうだった？」

「は？」

「日曜。」

「デートじゃないよ、写真撮ってるの見て話しただけ。」
「ふーん。」

「……ねえ、先生は天国信じる？」

俺の頭に今日の行事はすでになくなっていて、先生にそう尋ねた。答えに興味がある。

「人の自由だろ。」

そう一蹴された。

「あつそ。」

聞く相手を間違えた気がする。

「さつさと帰れよ。仕事たまってたんだ。」

「はい。」

特に残るような理由もないから俺は家に帰ることにした。

「山崎！」

帰ろうと下駄箱を開いたところで自分の名前を呼ばれた。

「……なんだ齋間か。」

まあ別に何の期待もなかったが。

「なんだとはなんだ。俺と一緒に帰ってやろうってのに。」

「ごめんなさい、遠慮します、必要ありません。」

棒読みでそう言い、靴を履き替えて歩き始めた。

「え、ちよつ……ちよつと待て！！」

慌てて靴を履き、足を進める俺の斜め後ろに齋間が寄ってきた。

「何。」

「……なんか無茶苦茶不機嫌にじゃねえ？」

「別に。なあ、お前天国って信じる？」

同じ年の齋間が何て答えるのか、少し興味を持った。

「山崎……宗教団体に入っただの？」

絶望的な眼差しで俺を見ている斎間。

「お前に聞いた俺が馬鹿だった。」

「いや、嘘！！軽い冗談だよー！！」

足を速めた俺を斎間は追い掛ける。

「信じるよ、天国。」

「……何で？」

「死んだ人間の行き場なくなるから。」

「……。」

「あ、もしかしてひいた？」

「いや……」

びつくりしただけだ。中野先輩と似たようなことを言うから。

「にしてもさ、天国とかって山崎のキャラじゃねえよな。」

ニカツと笑みを見せてそんなことを言われた。

「あつそ……じゃあな、ハゲ。」

自分でもらしくないことを言ったことを自覚してしまい、照れ臭くて斎間から目を反らして歩き去った。

「俺はハゲじゃねえ、ただの坊主頭だ！！」

そう高らかに叫ぶ斎間の姿は、誰から見ても滑稽だっただろう。

今日は何の日？（後書き）

すみません……しばらく週一ペースの更新になります。生活環境が落ち着いたら少し早めたいです。

次回は山崎君がある人を軽く尾行します（笑）

哀しみの花束。

斎間と離れた後、なんとなく普段と違う道を通っていた。その『なんとなく』が、中野先輩の過去を知るなんてこの時の俺は全く考えてなかったんだ。

「先輩……？」

花屋から出てきた先輩を見たのは太陽がオレンジ色になった頃。俺の居る場所とは反対側の歩道を、中野先輩は歩いていた。

先輩は沈痛な面持ちで菊の花束を両手に持っていた。

今日何があるのか。付いていけば確実にわかる。

少し悩んだが、俺は先輩のあとをつけた。

「……。」

行き着いた場所は墓地だった。先輩はうつ向き気味に歩む。

墓参り。先輩の様子でどことなく予感したそれは本当だったと気づく。

制服姿で墓地を歩くのは違和感がなくて少し意外に思っていると、先輩の足が止まった。

見た目新しい墓石の前にしゃがんで静かに手を合わせる。先輩の長い黒髪がサラリと揺れた。

「……久しぶり、豪。」

ポツリと呟いた先輩の声は普段と違う優しいものだった。

「一ヶ月ぶりに来たけど、あんまり汚れてないね。」

豪のお母さんが掃除してるのかも、と墓石に話しかけている先輩。それは端から見れば異質かもしれないが、俺はそんな風に思えなかった。

「……もう豪がいなくなってから二年だね。私ちゃんと生きてるよ、偉い？」

はにかむように微笑むが、声は震えていた。

「本当は、会いにいきたいんだよ？」

帰ろう。此処に俺はいるべきじゃないというか、いちや駄目だと思っただ。

先輩に気づかれることのないよう、静かに帰り道を歩く。

「……山崎君？」

足が止まった。心臓も、止まるかと思った。

後ろを振り向けば、先輩はすでに立ち上がって俺を見ていた。

「どうしたの、こんなところで……。」

俺がいることに対しての驚きと、こんな状態を見られての焦りが先輩を支配していたようだ。

瞳が濡れた先輩の顔を見ただけで俺は複雑な気分になった。

「帰り道で先輩見掛けて、なんとなく声かけるタイミングつかめな

くて……」

しどろもどろな俺。肝心なときに冷静になれない自分に心底腹が立つ。

「……もしかして、さっきから見てた？」

俺は首を縦に振った。

「そっかぁ。」

先輩は気まずそうに笑う。それを見た俺の心臓はチクツと痛んだ。

「あの……」

「前に言っただじゃない？ 彼氏がいるって。」

謝ろつと俺が口を開くと先輩がそれをさえぎって話し始めた。

「今は空にいるの。皆は此処に眠ってるって言っけど。」

墓石を見つめ、先輩は呟く。

「先輩……。」

「大切な、あたしの彼氏なんだ。」

そこから先は、よく覚えてない。気がつけば自分の部屋に寝転がっていた。

「……。」

阿澄先生の言葉の意味が今わかった。

『中野はお前の何倍も大人だったこと。』

「明日どうすんだよ……。」

会わせる顔がない。たぶん俺は先輩を傷つけたから。

痛む心とは反比例に瞼が重くなり、次に目を開いたときは朝日が昇っていた。

知らされる事実。

そのすぐ後、しばらく保健室には寄り付かないことに決めた。
それなのに……俺は本当にタイミングの悪い人間だ。

「大丈夫かよ。」

「ああ……。」

体育の授業中、手首を捻ったのだ。どんくさいにも程がある。

「結構赤くなってるけど……。」

「大丈夫だって。」

体育教師に保健室へ行けと指図され心配性の坊主頭こと斎間が子供についてた。

「はあ……。」

中野先輩がいるかもしれないという考えが頭をよぎり、自然とため息が溢れる。

「何だよ、やっぱり痛えんじゃん。」

「違う、保健室が嫌なだけ。」

「……はあ？」

斎間は呆れ顔で首を傾げた。

「お前いつもサボりに使ってたじゃん。」

意味わかんねえ、とぼやく。

「時の流れが変えた。」

「……ますます意味わかんねえ。」

俺も自分自身の言葉が謎だ。でもとにかく、保健室には行きたくなかった。

「早く入ろうぜ？」

「……………」

来てしまった。

あっという間に保健室の前に。

「おい、山崎？マジで大丈夫かよ。」

「……………」

捻った手首よりも心臓の動きが凄かった。

コンコン。

「失礼しまーす。」

「っておい……………!!」

斎間が保健室のドアを開けた。勝手に。俺の意見を全く聞かず勝手に。

「何の用だ？」

「…ホントに男だ。」

「まだ言ってるのかよ。」

啞然とする斎間を尻目に、俺は保健室をグルッと見回した。

先輩はまだ来てない。それは俺を安心させた。

「何だよ、見せ物じゃねえぞ。」

阿澄先生は不機嫌そうな声を出す。

「あ、こいつが手首捻ったんスよ!!」

思い出したように大声を出す斎間。

「山崎が？」

意外そうな目で見られて俺は顔を背けた。

「診てやるから来い。」

「……………」

先生の方に行く途中で後ろを見た。

「何？」

「帰ってて良い。」

「何で？」

「お前にそこまで心配されるほどの怪我じゃないし。」

「……わかった。」

不満そうだったが俺の真顔に納得してくれたようだ。ドアを閉めるまで俺と先生の顔を見ていた。

「腕出せ。」

「……。」

捻った部分を見れば、真っ赤に腫れあがっていた。それを見たら急に痛みがやってきた。

「何があつたんだ？」

「体育で仲間とぶつかっ……」

「そうじゃねえよ。」

「……え？」

「昨日何があつた。」

「バレている。否、感づいている。」

「……。」

「中野がまだ学校に来てない。」

中野、その単語を聞くだけでピクリと体が動く。

「それでも言わねえの？」

「……っ。」

俺は話した。昨日の墓地のことを。

「……お前は馬鹿か。」

「ば、馬鹿って……」

反論しようと口を開くが言葉が出てこない。そんな様子を見て先生はため息を吐いた。

「飯田豪。それが中野の恋人だよ。」

初めてフルネームを聞いた。知らない人だけど、知らないままでいるわけにはいかない気がした。

「どんな人だった？」

「さあ。」

「……は？」

「俺だって会ったことねえし。」

会ったことがないのに何故名前を知ってるのか。

「中野が幸せそうに話してたんだよ。週一ペースで。」

まるで俺の心を読んだように先生は答える。

俺はただ黙って話に耳を傾けていた。

「って言っても、高二の春までだったがな。夏休みに豪は死んだ。」

「会ったことないのに、呼び捨て？」

「いいんだよ別に。中野がいつも呼び捨てしてたからうつった。」

どこか懐かしむ表情を見せる先生。

「いつも側にいてくれる優しい幼馴染みだったんだと。あー、高校入ってから付き合い出したって言ってたな。」

「……。」

趣味が全然違うから話がわからないけど楽しいとか、家の近くの公園で初デートしたとか、先生は色々と教えてくれた。

でも話はほとんど耳から耳に抜けていった。

「聞いてる？」

「あ……まあ。」

「知リたかったと思ったけど、違うわけ？」

「や、違うくない。ただ……」

「？」

「何で、死んだの？」

それが一番知りたかった。先輩と豪って奴が相思相愛だったのは昨日の先輩の様子で痛いほどわかったから。

「ビョーキ。小さい頃から心臓悪かったんだと。」

「……。」

「死んだ人間には勝てねえぜ？山崎。」

ほら、と腕を離された。手当てはいつの間にか終わっていた。

「別に勝つつもりなんてない……。」

「好きなんだろ？」

面と向かつてはつきり聞かれたその瞬間、頬に熱を持つのを感じる。

「今時の男子高校生にしちゃ純情だよな。」

フツと笑みを浮かべて先生が言う。俺が文句を言おうと口を開いた瞬間――

ガラッ……

保健室のドアが開いた。

空のナミダ。

「先輩……。」

「おはよ、二人とも。」

先輩はいつものように笑顔で自分の指定席に座った。

「あの、昨日は……。」

「あーいいよ。知ってる人は知ってた話だし。それに……山崎君なら知ってても大丈夫な気がするから。」

綺麗な笑顔に俺は顔に熱が集まるのを感じた。信頼されている、それが俺を喜ばせる。

「んじゃあ山崎。とっとと授業戻れ。」

時計を見れば授業終了まで後十五分。戻りたくないのに――

「帰れ。」

「……はい。」

半強制的に保健室から追い出された。それは珍しいことで、何か意図がある気がしたが気付くことはなかった。

「あ、やーっと戻ってきた。」

「……。」

斎間に出迎えられ、残り十分の授業を行った。

「なあ山崎、帰りどっかで飯食わない？」

腹減ったー、とうわ言のように俺の横で呟く。周りの男子はガヤガヤと制服に着替えていた。

「良いよ。」

そう答えたら、斎間が目を丸くした。

「……何。」

「あ、いや……珍しいなあって思ってた。」

「そう？」

「だってお前誘っても断るじゃんか。」

「思い返せば確かに断ってた気がする。」

「何か良いことあったわけ？」

「斎間の問いに中野先輩の笑顔が頭に浮かんだ。」

「……別に。」

「ふーん？まあいいや。何食べよつかない。」

「楽しそうに斎間は着替えを始めた。俺は机に顔を乗せて、熱った体をしばらく鎮めることにした。」

「ファミレスで良い？」

「おー。」

放課後、俺と斎間は学校近くのファミレスに向かっていた。

「急に天気悪くなってきたな。傘ある？」

「折りたたみなら。」

カバンに入れたままだった傘がようやく役立つようだ。

「俺も折りたたみ。入れっぱだったんだよねー。」

「斎間と同じ思考回路だったことにはショックだが、一つの傘に二人の男が入るのは嫌だったのでよしとしよう。」

「そんなことを考えているうちに、雨がパラパラと降り出した。」

「うわ降ってきたー！」

慌てて傘を開く。まだ小雨だったのでそれほど濡れずに済んだ。

「今日に限って何であんな混んでたんだー？」

「……雨だから？」

そのファミレスには珍しく、二十分くらい待たなければならぬほどの盛況ぶりだった。そのため、俺と斎間はそこを諦めて雨の町中をさまよっている。

「帰らない？」

「あーあ、せつかく山崎と遊べると思ったのによー。」

ふてくされる斎間を横目で見たそのとき、少し離れた場所にいる見知った人物を見つけた。

「悪い、斎間！！用事思い出した！！」

「は？おい山崎……っ！！」

斎間の呼び止める声はちゃんと聞こえていた。でもそれに構っていたとしたら、確実に見失う。

折りたたみ傘を揺らしながら俺は走った、中野先輩の元に。

「先輩！！」

追い付いた場所は公園の前だった。雨足が強まってきて、通行人は俺と先輩以外いなかった。

「山崎、君……。」

「何やってんですか……風邪引きますよ？」

折りたたみ傘を先輩に寄せる。すでに先輩はびしょ濡れだったが、これ以上体を冷やすのはよくないと思ったからだ。

「……忘れられないの。」

「え……」

「頑張ってるのに忘れられない……!!」

先輩の頬を伝うのは雨粒か、涙か。

「これじゃ前に進めないよ……。」

一瞬、何のことを言っているのかわからなかったが、泣きじゃくる先輩の姿に『恋人』の二文字が浮かび上がった。

「何か、あったんですか……?」

昼間は明るい姿を見せてくれたのに。

「……山崎君が授業に戻った後、阿澄先生に言われたの。一生独りで終わるのか、って。」

先輩の涙はなかなか止まらない。

先生が俺を保健室から追い出したのはそんな話をするためだったのか、と少しばかり驚く。

「あたしだって、このままじゃ駄目なのはわかってるんだよ?だからこれを、捨てようと思った。」

握りしめていた手を開いた。そこには指輪が二つついたネックレスがあった。

「豪がくれたの。一つずつつけてたんだ。」

「そう、ですか……」

返す言葉が見つからなかった。

「豪が死んでからは両方ともあたしが持ってるの。なんか側にいる気がするから。」

二つの指輪に悲しげに微笑む先輩。

「……天国が見たい、って前に言ってたじゃない?」

俺は黙ったまま頷く。

「本当はね、天国が見たいんじゃないって、豪に会いたかったの。一目だけでも……。」

そう言った先輩は今にも消えそうなくらい儚げに見えた。

「……あの。」

「？」

俺は折りたたみ傘を持つ手に力をこめる。

「先輩が好きです。」

空のナミダ。(後書き)

読んでくださりありがとうございます。

今日が更新日なのをすっかり忘れていました(+o+)一週間に一度は記憶に残らない気がします。執筆が全て終わったら、更新早めようと思います!!

心に決めたこと。

数秒間の沈黙。

「……ごめん。」

予想はしてたが、先輩の答えは『NO』だ。

「もし付き合ったら山崎君を、豪の代わりに見ちゃう。」

先輩は下を見ながら言った。

「真面目ですね。」

「……何が？」

「代わりに見ればいいじゃないですか。豪さんの代わりにすればいい。」

代わりになろう、そう決めた。それで側にいれるなら構わない。

「何、言ってるの……そんな駄目に決まってるじゃん。」

変なものを見るような目で俺を見つめる。

「忘れたいならそれなりのことした方が良いでしょう？手伝わせてください。忘れたいのなら。」

「でも……！」

「じゃあ一生このままで良いんですか？」

「それは……」

煮えきらない態度の先輩。茶髪の毛先から雨の雫がポタポタ落ちて
ている。

「俺じゃ、不満ですか。」

「違う違う！！そうじゃなくて……」

「なら良いですよ？俺でも。」

「……。」

「今日はとりあえず送りますよ。」

先輩の手を引いて俺は歩き出した。

「山崎君……。」

何度名前を呼ばれても、振り返ることが出来なかった。先輩が怒ってる気がしたから。実際は怒ってなんかなかったらしいけど、俺自身が強引すぎる自分に怒っていたのかもしれない。

所々、道を聞きながら先輩の家にとどり着いた。

「明日、迎えに来ますから。」

先輩はうつ向きで黙り込んでいた。

「じゃ……。」

先輩の様子をサッと盗み見てから俺はその場を去った。

「今日どうしたんだよ。」

いぶかしげな声が聞こえる。電話の向こうにいる斎間の眉根にシワが寄るのが想像出来た。

「ちよっと約束思い出したんだよ。悪かった。」

「別にいいけどさー。」

「……あのさ。」

「ん？」

「俺頑張るから。」

「何を？」

「色々と、さ。」

「……ふーん。」

その後は淡々と会話を交した気がする。決意を現せてホッとした

のだろう。

誰かに伝えないと、気持ち揺らいでしまうと思った。死んだ人間の代わりになる、そう決めていたのに帰りがけの先輩の様子で早くも後悔し始めていたから。

「斎間！」

「……何。」

「なんか、自分が情けない。」

つい口にした本音。勿論斎間にも聞こえている。

「頑張れ。」

「……え？」

数秒の沈黙を破り、斎間は俺に言った。

「何かよくわかんないけど、頑張らなきゃいけねえんだろ？ そんなら頑張れ。」

「……おう。」

真っ直ぐなコイツらしい応援。それは俺の大きな力になった。

いつもと違う朝。

現在の時刻は六時四十分。太陽がゆつくりと顔を出し始めた頃、俺は先輩の家の前にいた。

「ふぁ……。」

はつきり言つて、眠い。欠伸は三分に一度の高い割合だ。

俺は代わり映えのないカーテンのしまった二階の窓を見上げた。

先輩に避けられる恐れは大きい。昨晚そう考えた俺は出来る限り早起きをして待ち伏せを試みることにした。半ストーカーのこの状態は、精神的に辛いものがある。

「はぁ……。」

ため息の数も欠伸と同レベルで多かった。

ガチャツ……

「あ、おはようございます。」

「……おはよ。」

それから三十分後、中野先輩は家から出てきた。

軽く微笑みを見せる先輩に俺の眠気と低かったテンションは消え去った。

「山崎君。」

「は、はい。」

不意に名前を呼ばれ、心臓が跳ねる。声も上手く出せなかった。そんな俺の様子に先輩は笑顔を浮かべた。その瞬間、先輩の顔が近付いてくる。

「目の下、クマ出来てるよ？」

「え。」

クス、と先輩は笑った。

「あたしが家出るの八時だから、明日からもう少し遅くおいで？」

「そ、それって……俺がいても良いってことですよ？」

「当たり前でしょー。あたしの彼氏なんだから。」

昨日とはえらい違いだ。意外すぎて俺は戸惑ってしまった。

「ほら、学校行こ？」

「は、はい。」

学校の始まる時間は八時五十分。先輩の家から学校までは三十分ほどで、今から行くと早すぎるくらいだ。

「窓の外見たらびっくりしちゃった。山崎君何時から来てたの？」

「六時半くらいから……」

「早すぎだよー。あたしが避けて早めに行くとか思ったの？」

凶星だ。俺は黙って頷く。

「……一瞬、それも考えたんだよ。」

うつむいて先輩は呟いた。歩きたびにお互いの髪がふわりと宙を舞う。

「昨日一晩ずっと悩んだ。豪の顔と山崎君の顔が頭の中から離れなかった。」

やはり困らせてしまった。何も言えず黙ってただ歩いた。

「山崎君のこと嫌いなんじゃないから、頼ってみようと思った。」

「……俺、頑張りますから。」

「うん。ありがとう。」

そう答えて綺麗な笑顔をを見せてくれた。

「それにしても……山崎君昨日と態度違いすぎじゃない？」

「……そうですか？」

おそらく気持ちの浮き沈みが原因だろう。

「うん、二重人格みたい。」

「え、違いますよ!!」

「大丈夫。ちゃんとわかってるって。」

俺と先輩は笑いながら学校に行った。

永遠の記憶。

「あれ、どこ行くの？」

「保健室。」

斎間に短く告げて、俺は足早に保健室へ向かった。

「珍しくご機嫌ナナメってやつ……？」

苦笑気味に斎間がそう言ったことを、俺は知らない。

「失礼します。」

「……またお前か。」

書類に目を通していたところだったようで、阿澄先生は眼鏡をかけていた。これがまた似合う。

「サボりはもう無しだぞ。」

視線が俺から書類に戻る。

「今日はサボりじゃなくて話をしに来た。」

「何。」

「どうして先輩の傷を広げるようなこと言っただんだよ。」

「……中野のことか。」

ふと我にかえったように先生が言う。

「ああでもしなきゃ、中野はずっとあのままだと思ったから。」

「だからって……言い方があるだろ？」

突き放すような言葉に俺は不快感をあらわす。

「山崎が知ってるってことは、その後に会ったんだな。」

含み笑いを浮かべ、俺を見やる。

「だったら何。」

「ちゃんと助けてやれよ？」

「……は？」

「俺じゃ何も出来なかった。この一年近くずっと。」

「そうだ、この人は俺よりも先輩と時間をともにして、ずっと先輩を見てきたんだ。」

「中野はお前に任すからな。」

「予定が変わってしまった。文句を言うつもりが応援されている。」

「他に言うことがねえなら授業行けよ。」

「……今日、先輩来てないの？」

「来ねえだろ、もう。」

「ペンをくるくる回して先生はため息を吐いた。」

「寂しい？」

「ふざけんな馬鹿。」

「凶星なのか、頭をガリガリかいていた。」

「前からなんとなく思っていたことがある。先生は先輩をいつも見守っていた気がした。」

「頑張るよ。恋人忘れさせるくらい。」

「……。」

「そう言ったら先生に肘打ちされた。」

放課後――

「あ、山崎君。」

「すいません、待ちました？」

「うっん、大丈夫ー。」

学校近くの路地裏で先輩と待ち合わせ。皆に知られずひっそりと付き合うことにしたからだ。

「今日は久々に授業全部出たんだ。」

「……そうですか。」

ふと先生の顔が頭をよぎった。

「今日阿澄先生に会いましたよ。」

「……そう。」

先輩の顔に陰がさす。死んだ恋人について追求されたことがまだ心にあるのだろう。

「あの、これからどうしますか？」

「んー、行きたいところあるの。」

そう言つと先輩は俺の手を握った。

「……」

先輩に連れてこられたのは、飯田豪の眠る墓地。

「山崎君のこと報告したいの。ここで待っててくれる？」

「わかりました。」

小走りで先輩は行ってしまった。残った俺はやることもないのでボーンと空を眺めていた。

「お墓参りですか？」

不意に声をかけられた。

見た先には和服姿のお婆さんがいた。

「その付き添いです。」

「そうですか。」

やんわりと微笑むお婆さん。全体的に細身だが、和服で更に華奢に見えた。

「お墓参りですか？」

今度は俺から尋ねる。

「ええ。初恋の方、ですよ。」

ふふつ、と笑う。その頬は微かに赤色に染まっていた。

「ずっと心にいてくださった、愛しい方。」

「それって旦那さんは知ってるんですか？」

「いいえ。これは私と初恋の方との秘密です。ただ、今の夫と一緒にいたから、幸せなんでしょうね。」

こんな人もいるのだ。俺は心のどこかで安心した。そのとき――

「山崎君。」

「先輩。」

先輩が戻ってきた。

「待たせてごめんね？」

「いえ。」

お婆さんと目が合い、軽く頭を下げる先輩。

「……誰？」

「さっき知り合ったんです。」

「そちらが付き添ってた方？」

お婆さんは穏やかな微笑みを見せ、俺に尋ねた。

「そうです。」

「そう……どうか貴方達に幸せが訪れることを。」

それじゃ、と言ってお婆さんもお墓のあるところへ去っていった。

「優しそうな人だったね。」

「そうですね。」

「山崎君。」

「はい？」

「もし、もしのことだからね。」

「……はあ。」

曖昧に頷くしか出来なかった。先輩があまりにも真剣で暗い顔をするから。

「あたしが死んだら、泣いてくれる？」

「……。」

泣きそうな声。俺より数歩先を歩く先輩の肩は微かに震えていた。

「どうしたんですか。」

さっきまで普通だったのに……。

「あのお婆さん、何回か見たことあるの。」

優しそうに微笑む姿が浮かぶ。

「前はいつも同じお墓の前で泣いてた。でも最近は笑顔なの。それって、忘れちゃったってことなのかな……？」

「……。」

「私は、忘れたくなんかないの。たとえ何十年経っても。」

湿気が凄い。気付けばもうすぐ夏になるうとしている。

手が汗ばむのは、暑さのせいだろうか。

「ねえ、山崎君。あたしが死んだら、貴方の記憶からあたしは消える？」

「……消えません。というか消しません。」

消せるわけがない。大切な好きな人だから。

「ありがとう。」

歩く速度を速めた先輩を走って追い掛けた。そのついでに、先輩の左手を握った。いわゆる手を繋いだ状態。

「ちよつ、山崎君？」

戸惑いを見せる先輩。心なしか照れているように見えた。

「あのお婆さんには、今旦那さんがいるらしいですよ。」

「そう……。」

繋いだ手が熱い。俺は心を落ち着かせながら口を開いた。

「これは俺の推測ですけど……お婆さんは忘れたんじゃないか、って、悲しみを乗り越えたんじゃないか、って。」

「乗り越えた……。」

「大切な旦那さんの隣で。」

「……。」

「まあ、所詮推測でしかないんですけどね。」

珍しくまともな台詞を吐いてしまった。少し恥ずかしい。

「うつん、あたしもそう思う。」

泣いてたはずの先輩は顔を上げて言った。

「っていうか、そう思いたい。」

「……そうですね。」

繋いだ手を前後に揺らし、俺と先輩は帰路についた。

無意識の声に。

「中野が熱で休んだ。」

「……え？」

今は四時間目の真っ只中。俺はいつものように授業から逃げて保健室に来ていた。

沈黙を破った阿澄先生の一言が冒頭のもの。

「だから、今日熱で休むって親から連絡があつたんだと。」

「いや、だって今日はサボるから迎えに来なくていいってメールが……。」

「お前毎日迎え行つてんの？よくやるな。」

感心されてる場合じゃない。

「ホントに熱？」

「確かめに行きや良いだろ？彼氏なんだから。」

彼氏という言葉に顔が熱くなる。

「なんだ、まだ慣れてねえの？」

「……うるさい。」

馬鹿にされたような気がして、眉間にシワを寄せた。

「ん。」

「何？」

ヒラヒラと先生の手の紙が揺れる。

「早退届。いるだろ？」

「……。」

「はあ……。」

来てしまった。現在の時刻は十二時過ぎ。

「というか、先輩はちゃんと家にいるのか……？」

サボりだったら家にいないで被写体を探しに行つてそうだ。

あれこれ考えた結果――

ピンポン。

呼び鈴を押すことにした。

「……はい、どちら様ですか？」

インターホンから先輩の声が聞こえた。いつもより少し低めの声。

「あ、あの……山崎ですけど……。」

「……山崎君？」

「はい。」

「何してるのさ？今日はサボるからって言わなかった？」

「先生に風邪ひいて休みつて聞いて、心配で……。」

「……先生つて阿澄先生？」

「それ以外誰がいるんですか。」

学校で俺や先輩を気にかけてくれる教師は、阿澄先生しかない。

「ゴホッ……大丈夫だから学校戻りなよ。」

ドアに手をかけたら、簡単に開いてしまった。無防備過ぎて先輩が心配になったが一先ず上がらせてもらうことにした。

「山崎君、聞いてる？」

先輩は俺が勝手に部屋に上がったのに気付いてないらしい。

「今聞いてます。」

「なっ!？」

「すみません、勝手に上がりました。」

あまり申し訳ないと思ってないけど。

「勝手にって……」

「何か食べました？」

文句を言われそうだったから先に尋ねた。

「……。」

先輩は首を横に振る。

「部屋で寝ててください。」

「何言ってるの、山崎君は帰りなさいって。」

「無理です。」

「……はい？」

「辛そうにセキしてる人間を見放すほど、酷い奴じゃないんで。」

「……。」

先輩はうつむき、黙ってしまった。

「自分の部屋行って寝てください。お粥でも作りますから。」

「……わかった。」

渋々、先輩は自室へと消えていった。部屋の場所は台所に繋がる廊下の一番奥にあったから迷うことはなさそうだ。

「よし。」

Yシャツの腕をまくり、俺は料理の準備に取りかかることにした。

「先輩？」

「……。」

ドアの外で呼び掛けるが返事は無い。

「まさか開いてないよな……。」

冗談のつもりでドアノブを回した。

カチャ……

「……。」

無防備すぎる。呼び鈴を鳴らして先輩が出たところで家族は今誰もいないことがわかったのに……。年下とはいえ、男と二人きりで危機感は無いのだろうか。なんて、風邪をひいてる先輩には言う台詞じゃないが。

「入りますよ？」

ゆっくり静かに部屋に入った。作ったばかりのお粥を入れた容器がカタカタ音を作る。

「……。」

先輩の部屋は白と青を基調としたシンプルな部屋だった。

ふと荒い息遣いが耳に入る。

「先輩？」

ベッドに近付くと苦しそうに眉根を下げる先輩の姿。

一瞬戸惑ったが、先輩の額に手を置く。

「熱い……」

先輩は額に汗を浮かべ、呼吸することすら苦しそうだった。

俺はテーブルにお粥を置き、台所に走った。

諦めと哀しみ。

「……………」

先輩の額に濡れタオルを乗せる。表情が和らいで見えた。

「お粥は後で食べてもらうか。」

俺はお粥の乗ったお盆を持ち、立ち上がった。

「……………いで。」

「え？」

先輩が何か呟いた気がした。慌てて俺はベッドに駆け寄る。

「行かないで……………」

「先輩、」

泣きそうな声に心が揺らめく俺。そのすぐ後――

「豪……………」

頭に鈍器で殴られたような衝撃が走った。

俺じゃない。先輩が呼ぶのはもう此処にいない人間。

「……………」

ただただ、悲しかった。選ばれることのない自分が。

「豪……………」

苦しそうな先輩。手は空を切り、必死に恋人を探していた。

「か、歌穂。」

どもってしまったが、名前を小声で呟く。空に浮いた手を両手で包んだ。

「豪……………」

汗ばんだ手が弱々しく握り返してきた。安心しきった顔を見せる

先輩が嫌だった。それは自分に向けられたことのないもので、この先も向けられることはない気がしたからだ。

「……。」

安らかに眠る先輩の頬に触れた。

豪という人は、どれくらいこの肌に触れたのだろうか。どうして

……こんなにも彼女の心に在り続けるのだろうか。

思わず泣きそうになる。代わりということを思い知らされるから。

「ん……山崎、君？」

「おはようございます、先輩。」

それから一時間くらい後、先輩はようやく目を覚ました。

繋いでいた手は数分前に離れた。夢にいた人間じゃない奴に手を握られても嬉しくないと考えたのだ。

「お粥作ったのに先輩寝てるから……また煮込んだんですよ？」

「あ、ごめんなさい……。」

申し訳なさそうな表情に俺はため息をつく。

こんな顔も可愛いと思う自分が情けない……。

「どうぞ。」

「……美味しそう。」

意外そうな表情でお粥を見つめる先輩。

「これくらいなら俺でも出来ますよ。」

「あたし料理苦手であ、目玉焼きしか作れないんだ。」

照れ臭そうに笑う。

「徐々に覚えれば大丈夫ですよ。これだってレトルトだし。」

「……うん、頑張らなきゃね。」

そう呟いて先輩はお粥を全て平らげた。

「お腹いっぱいだあ。」

「薬飲んで早く寝てくださいね?」

「……山崎君帰るの?」

「もう六時過ぎましたから。」

手早く帰る支度をして部屋のドアノブを握る。

「あ、見送りさせて?」

先輩はパジャマの上に薄い上着をはおった。

「いいですよ、早く治して学校来てください。」

「……わかった。」

今、俺はちゃんと笑えてたか?先輩の気持ちの変化がないことに、動揺して見せたような気がして不安になった。

「それじゃ、また学校で……」

「待って山崎君、一つ聞いていい?」

俺の言葉に乗る形で先輩が尋ねてきた。

「何ですか?」

「もしかしてあたしの手、握ってた?」

「……いえ?俺はずっと学校の勉強してましたから。」

体の横にある拳をグツと握り締めた。

「そっか……じゃあ夢でも見たのかな。ごめんね、変なこと聞いちやつて。」

「いえ……じゃ。」

軽く頭を下げて、先輩の家を出た。
その瞬間、携帯電話に着信が入る。

「……もしもし?」

『もしもしじゃねえだろ!!』

機械越しでも耳をつんざく大声。

「齋間？」

「齋間様だよ!! っていうかお前どうしたんだよ、普段授業サボっても学校は最後までいた癖に。」

「……ちよつとな。」

「何だよ、言えねえってか？」

「……ああ。」

俺の返事を聞いた後、齋間は黙り込んだ。

「齋間？」

「前に電話で話してたのと関係してんの？」

「前って……」

「雨の日にとっかで飯食おうって決めてた日だよ。」

頭がその日を思い出させる。俺が先輩に強引に告白した日だ。

「ああ……そうだよ。」

「……。」

また齋間は何も言わなくなった。

「頑張るって、決めたんだろ？」

「……齋間……」

「だったらそんな暗い声すんなよ。」

「……無理っぽい。」

「あ？」

「俺ばっか頑張っても、相手に変化がなきゃ意味ないんだよ。」

「……。」

怒っている齋間の顔が嫌でも頭に浮かんだ。

「明日。」

「え？」

「明日必ず保健室に来い、って阿澄先生からの伝言。」

「……わかった。」

電話を切る。こんな沈んだ気持ちは久々だった。

「はぁ……。」

明日がどうなるか全く想像出来ない。ひとまず俺は家へ帰る道を
早足で進んだ。

潮時。

「……………」

教室に寄ることなく保健室に来た。斎間に会わせる顔がなかったからだ。

コンコン。

「どうぞ。」

昨日聞いたはずの阿澄先生の声はいつもと変わらなかった。

「……………失礼します。」

「やっと来たか。」

机に向いていた体を俺に向ける。

「中野は今日ちゃんと学校来てるみたいだな。」

「……………」

何も言えなかった。先輩のことを話す気になれなかった。

「昨日、何かあったか？」

「別に何も。」

「じゃあお前が暗いのは俺の気のせいかな？」

「……………熱でうなされてた先輩が呼んだのは、俺じゃなかったんだよ。」

「豪か？」

悔しさから下唇を噛み、俺は頷いた。

「最初は代わりでも良かった。でも、今は……」

先輩の隣にすることが辛い。どんなに自分が先輩を想っても、報われないことがわかったから。

「……お前がそれを選んだんだろ？」

冷静に先生は言った。

「……。」

「なあ山崎。」

「……何。」

「そろそろ潮時って奴じゃねえか？」

「……。」

「ま、俺が言いたいのはそれだけだ。」

それきり、先生は何も言わなかった。授業を終えるチャイムが鳴り響き、重い足取りで教室に入った。

「山崎。」

「……斎間。」

席につくと同時に斎間が寄ってきた。

「保健室、行ったか。」

「おう。」

「そっか。」

明るいクラスメイト達に比べ、気まずい雰囲気の俺達。

「俺さ、応援すつから。」

「？」

「何のことが全くわかんねえけど、相談だつて乗るし。だからさ……」

「……あんま無理すんなよ？」

「……うん。」

俺は素直に頷いていた。親友と呼べる友達が出来たことに感謝しながら。

「山崎君。」

「あ、ども。」

帰り道、先輩が俺を待っててくれたらしい。

「今日はね、話したいことがあって……。」

「何ですか？」

「あのさ、デートしょ？」

「……はい？」

唐突な言葉に思わず聞き返す俺。

「昨日のお礼がしたいの。駄目、かな？」

「……良いですよ。」

「ホント？良かったー。」

嬉しそうな笑顔を見せる先輩。

「ただ、行き先は俺に決めさせてくれませんか。」

「？良いけど……。」

「ありがとうございます。」

不思議そうな先輩をよそに、俺は一人大きな決断をしていた。

潮時。(後書き)

毎週月曜日の更新でしたが一日遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

最後まで下書は済んだので、あとは訂正するのみです。

読者の皆様、いつもこんな稚拙な小説を読んでくださり、ありがとうございます。

これからも精進いたしますので、どうか読んでやってください。

最初で最後。

「今度の日曜日で良い？」

「はい。」

俺と先輩のデートの日が決まった。

「何処に連れてってくれるの？」

「まだ秘密です。」

そっかぁ、と残念そうに先輩は呟いた。

本当はすでに行き先が決まってる。でも当日に驚かせようと思ったから言わなかった。

「山崎君。」

「はい？」

「これあげる。」

先輩が差し出したのは水色の封筒。

「……何ですか、これ。」

「家に帰ってから開けて？昨日看病してくれたお礼だから。」

はにかむような笑顔に俺は自分の顔がゆるむのを感じた。

「さてと……」

ベッドに寝転び封筒を開けた。

写真いっぱい広がる真っ青な空。何処かで見た懐かしい景色な

どの写真が十枚近く入っていた。

「……。」

一通り見終わってから封筒にメモ帳が入っていたことに気付いた。

『いつもありがとう。』

その一言だった。先輩らしいといえば先輩らしい手紙だ。

「……はあ。」

俺のため息は空に消えた。

そして日曜日――

「おはよ。」

「おはようございます先輩。」

先輩の家に迎えに行った。出迎えてくれた淡い水色のワンピースを着た先輩は、なんだかとても楽しそうに見える。

「何処に行くの？」

「………ついてきてくれればわかりますよ。」

俺は先輩の手をひいて歩き始めた。

「………何で、此処なの？」

「会いたいんです。俺も豪さんに。」

先輩の想い人の墓前。初めて見たそこは、雑草も生えておらず、隅々まで手入れされていた。

「……初めまして、山崎優斗って言います。」

俺は軽く頭を下げる。後ろでは先輩が不安そうな顔をしていた。どんな顔かもどんな性格かもわからない。だけど、先輩が好きなのはこの数カ月でよくわかった。

「貴方の恋人に片想い中です。」

「や、山崎君……。」

恥ずかしそうに声をあげる先輩。

俺は顔を上げて後ろにいる先輩を見つめた。

「公園、行きませんか？」

「ねえ、どうしたの？」

ベンチに座って二人並んで缶ジュースを飲む。

「何がですか？」

「なーんかいつもと違う。」

丸い瞳に俺が映った。

「馬鹿ですよ、叶わない恋をあきらめられないなんて。」

「……それ、あたしのこと？」

今度は先輩の目が細くなった。少し怒った顔も可愛く見える。

「まさか。俺のことですよ。」

気付いたんだ、いや、気付いてたんだ。恋人の代わりにはなれないって。

「先輩。」

「……何？」

「俺には無理です。」

立ち上がり、先輩に背を向けて小さく言った。

「代わりには、なれません。」

「……。」

「代わりでもいいとか勝手なことと言って無理矢理付き合って、結局代わりでいることが辛くなりました。」

「……そっか。」

先輩の顔は見れなかった。見る勇気がなかった。

「……失礼します。」

結局、一度も先輩の方を振り向かず走り去った。

「最低だ……。」

自室にこもって自分の醜さにへこんだ。

好きなのに、俺はその気持ちを伝えられるほどの人間にはなれていなかった。

情けなくて、涙が出そうで……布団にもぐったまま、俺は朝を向かえた。

未遂。

あまり眠れなかった。

「ふぁ……。」

こんな日も学校があるなんて正直辛い。とは言っても、先輩の方が辛いと思う。

ちゃんともう一回謝らなきゃ……。

「おつす。」

「あ……。はよ。」

朝から斎間に会った。

「今日も暗いなーお前。」

「……。ちよつと、な。」

「また訳ありか？」

「ああ。」

そんな話をしながら学校についた。

「あー、あれ阿澄先生じゃねえ？」

「……。」

斎間の言う通り、校門に寄りかかっている阿澄先生の姿があった。生徒指導かと思ったが、腕を組んで不機嫌そうにこちらを見ているので違つとすぐにわかる。そう、俺を見ているのだ。

「……。」

先生は無言で、何も言うことはなかった。俺が横を通り過ぎるまでは。

「……。中野がリストカットした。」

「――!!」

唐突で予想外の言葉に息を飲む。

「今総合病院にいるから、行ってこい。」

「……。」

行けって言われても……無理だ。会わず顔がない。

「行かねえのか？」

俺は答えられずうつむいた。

「どうせ自信なくなったからお前逃げたんだろ？」

完全に見透かされていた。

「自分のせいだと思うなら、お前が責任とれ。」

「……。」

弱くて情けない自分に腹がたち、下唇を噛み締める。

「行けよ。」

ずっと横で黙っていた斎間が小さな声で言った。

「斎間……。」

「授業なら俺がちゃんと誤魔化しとくから、早く会いに行け。」

「……。」

「もう話せないかもしれないだろ！？ほら早く!!」

背中を斎間の手と声とで押され、弾けたように俺は走り出した。

「……斎間君。」

「はい？」

「お前遅刻な。」

腕時計はすでにホームルームの始まる時間になっていた。

「げっ!!大目に見てよ先生!!」

「無理だろ。っていうか無理だ。」

「マジかよ……。」

そんなやりとりがあつたのを俺は知るわけもなく、ただただ走っていた。

「はっ……はあっ……。」

自分の足がこんなに遅いと思わなかった。

早く行きたいと焦れば焦るほど、足が遅くなる気がした。

「すいませ……中野歌穂さんの病室って、何処にありますか……！」
？」

息を整えながらナースステーションで尋ねる。

周りにいる患者は、汗だくの男子高生を珍しそうに見ていた。

「中野さんは集中治療室で手術しています。」

集中治療室。その言葉に背筋が凍った。

「……危ないんですか？」

「……治療室はあちらです。」

「……。」

進めば進むほど足が重くなる。

気が付けば薄明かりのつく廊下にいた。

「どうしたの？」

話しかけられて伏せていた顔をあげた。

どこか先輩に似た顔。もう少し大人になった先輩を見ているようだった。

「中野先輩の、お母さんですか……？」

先輩の母親は黙って頷いた。手にはシワくちやのハンカチ、相当

強く握り締めていたのだろう。

「歌穂は、昔から不思議な子でした。でもまさか自殺なんて……。」「震える涙声で母親が呟く。

「……俺のせいなんです。俺が先輩のこと傷つけた。」「

「貴方、山崎君？」「

「そうですけど……。どうして俺の名前……。」「

「これ、貴方に。」「

差し出されたのは空色の綺麗な封筒。

「……。？」「

「歌穂が書きました。」「

先輩が書いた手紙を前にして声が出ない。

「どうか、読んであげてください。」「

病室の屋上で先輩からの手紙を広げた。

「……。」「

先輩が手首を切る直前、何を思っていたのか。

汗ばむ手を気にすることなく、俺は手紙に目を通し始めた。

手紙。

山崎優斗様へ

突然の出来事に、驚いていますか？

この手紙を読んでいるとき、あたしは生きてないかもしれません。直接言えないから、今こうして手紙に書いています。

貴方とあたしが出会ってから、もう半年以上が経ちました。初めの方は保健室愛好者として、良いお友達だったと思います。

でもその頃のあたしは、まだ豪のことを忘れられなくて、悩んでいる毎日ばかりでした。豪がいるはずの空ばかりに目を向けて、現実からずっと逃げていたのです。

そんなあたしに気付いた貴方は、いつもあたしを気遣ってくれました。それは本当に嬉しかったです。

代わりになろうと頑張ってくれてたことも、本当は気付いていました。でもあたしは弱虫で臆病だから、ずっと気付かないふりをしました。ささやかでも大切な幸せを手放したくはなかったから。

貴方に甘え続けてごめんなさい。

貴方を傷つけてごめんなさい。

貴方を苦しめてごめんなさい。

今、全部を終わらせようと思います。こんな中途半端な気持ちで山崎君を苦しめたくはないから。

もしあたしが生きて再び貴方を見ることが出来たら、付き合つて欲しいのです。貴方の彼女として。……なんて、おかしいね、自殺した人間が言うなんて。

じゃあ、また会えることを願つて。

中野歌穂より

追伸

あたしが死ぬことを決めたのは、山崎君のせいなんかじゃありません。

だから、どうか自分を責めたりしないでください。最期までワガママなあたしを叱ってください。

泣きたくなるくらい、貴方が大好きです。

空。

先輩からの最初で最後の手紙を読んでから、もう一年以上が経った。それでもまだ、俺はその頃の自分を許すことはない。

「次は総合病院前……。」

バスのアナウンスで俺は停車ボタンを押した。
ゆっくりバスがバス停に停まる。代金を払い降りれば、そよ風が頬を撫でた。

「……。」

見上げれば真っ青な空。あときもこんな空だったな、なんて思う。

俺は花束を両手で抱えて病院に入った。

「山崎君。」

「こんにちは早川さん。」

気が付けば看護師さんとも顔馴染みになっていた。

「あら、今日卒業式だったの？」

胸ポケットについた花を見て聞いてきた。

「はい。それじゃ……。」

俺は先輩のいる病室に向かって歩き出した。

「毎日偉いわね……もう一年以上繰り返してるでしょう？」

「まだ目覚めないのにな……」

「でも、ちよつとした拍子で目覚めるかもって先生も言ってたし……」

「……」

「もう一年経ったのよ？ 厳しいんじゃないかしら。」

そんな白衣の彼女達の会話を知ることなく。

コンコン。

「こんにちは。」

返事はない。今日はまだ先輩のお母さんは来てないようだ。

「また来ちゃいました。」

「……。」

「今日俺卒業式だったんですよ。阿澄先生から花束もらいました。」

あ、歌穂先輩にですよ？

「……。」

俺がいくら話しかけても、先輩は眠ったまま。あのときから時間が止まったかのように先輩は何も変わらない。

俺が卒業したことも、少し背が伸びたことも知らず、ただただ先輩は目を閉じて与えられる酸素や点滴を受けとるだけの状態だ。

「花、飾つときますね。」

目を開けて、俺を見てほしい。涙はとうに渴れた。今の俺に出来ることは、ただ側にいることだけ。

「……先輩。」

俺の声は先輩に届くことはなく、無反応の先輩しか見ることがなかった。

「俺、まだ先輩しか好きになれないんですよ。」

どんな女の子を見ても、先輩が頭に浮かんだ。

こんなに好きだと思えたのは、今の状況があるからで。それは俺にとって許しがたいことだった。

「また隣にいてくださいよ……。」

絞りだした声は情けないもの。

「まだ空に行かないでください……。」

俺は必死に祈った。先輩の手を両手で包み、額に寄せる。

さすがに一年以上何も変わらないのは怖かった。不安で不安で、何も出来なくなった頃もあったのだ。

だからだろうか、先輩の手はほんのり暖かくて、俺は泣きそうになった。そしてその瞬間、先輩の手がピクツと動いた。

「せ、先輩？」

思わず立ち上がって先輩の顔を覗き込む。

「山崎、君……？」

戸惑いを見せていたものの、微笑みを浮かべた先輩を見て泣いてしまったのは二人だけの秘密だ。

それからの先輩は奇跡に近いくらいの回復を見せ、一週間で車椅子を使って移動出来るくらいになった。

「山崎君、散歩行こ？」

「はいはい。」

先輩は相変わらずマイペースで、たまに俺を散歩に誘う。

「もう大学生なんだねえー。」

感嘆の声が車椅子から聞こえた。

「先輩は二十歳ですね。」

「うわー、実感ない。」

それもそうだろう。一年以上意識がなかったのだから。

「まるで浦島太郎みたいね。」

「先輩が浦島太郎なら俺、帰り待ってます。お婆ちゃんになった先輩でも。」

「……ありがとう。」

頬を染める先輩に俺は口付ける。互いに照れ笑いをし、並んで上を見た。

空は今日も青く、綺麗だった。

空。（後書き）

完結ですね。

のんびりとした更新でしたが、読んでくださる方がいて嬉しく思います。

長々とした話でしたが、最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679b/>

天架ける橋

2010年10月8日14時13分発行